

# 唐話資料史における『唐韻三字話』

—『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較—

奥村 佳代子

## *Toin Sanjiwa* in the Relationship to Other Documents from the Towa period

OKUMURA Kayoko

*Toin Sanjiwa* is a manuscript copy of Chinese owned by Kansai University Library (Nagasawa collection). Although there is no information about the author or the date, the title affords a clue to its value. Given that a document exclusively on “sanjiwa” (three-character words) is rare, *Toin Sanjiwa* is valuable. It was one of the Towa collections studied in Kyushu in the Edo era.

This paper first analyzes the usage and vocabularies of the examples of sanjiwa collected in the *Toin Sanjiwa*. Through the examination of their characteristics, it will be shown that they were learned in Nagasaki during the Edo era. Second, the influence or succession between *Toin Sanjiwa* and *Nanzan Zokugo Ko* will be pointed out through a comparison with *Towa Sanyo* and *Nanzan Zokugo Ko*, two of the representative Towa documents. On the basis of my discussion, I would like to argue the possibility that *Toin Sanjiwa* shows an important part of the process of Towa learning in Kagoshima.

## 1. はじめに

江戸時代の長崎唐通事による唐話学習について、武藤（1926）には次のようにある。

長崎に於ける唐通事の支那語稽古の順序を略説するが、唐通事は最初発音を学ぶ為に『三字経』『大学』『論語』『孟子』『詩経』等を唐音で読み、次に語學の初歩即ち恭喜、多謝、請坐などの短き二字を習ひ、好得緊、不曉得、吃茶去などの三字話を諳んじて更に四字以上の長短話を学ぶ、その教科書が『譯詞長短話』五冊である、それから『譯家必備』四冊『養兒子』一冊『三折肱』一冊『醫家摘要』一冊『二才子』二冊『瓊浦佳話』四冊など唐通事編輯にかかる寫本を卒業すると此に唐本『今古奇觀』『三國志』『水滸傳』『西廂記』などを師に就きて学び進んで『福惠全書』『資治新書』『紅樓夢』『金瓶梅』などを自習し難解の處を師に質すといふのが普通の順序である<sup>1)</sup>。

武藤（1926）によると、唐通事はまず四書五經を用いて発音を身につけた後、二、三文字程度の語句を暗唱し、四文字の語句を経て、さらに長い語句や文を覚えたという。このような学習法は、岡嶋冠山の『唐話纂要』（1718）や『唐語（唐話）使用』（1735）等は、「二字話」から始まり、「三字話」「四字話」「五字話」「六字話」の唐話を羅列した後で、文字数制限のない「長短話」や会話が配されていることから、唐話学習法として定着していたと考えられるだろう。

江戸や京都で出版された『唐話纂要』や『唐語使用』の唐話と、長崎の唐通事による唐話資料である『譯家必備』や『唐通事心得』等の唐話の語彙や語法とは、両者を比較してその相違点を知ることが可能である<sup>2)</sup>。「二字話」や「三字話」は、武藤（1926）で書名としては言及されていないように、単独の書物や冊子の形で残されている資料に関しては、どの程度存在するのかということも、その実態についても、把握されてはいない。

## 2. 関西大学総合図書館長澤文庫蔵『唐韻三字話』について

関西大学総合図書館長澤文庫所蔵の『唐韻三字話』（以下、『三字話』）は、三字話を集めた書物であり、概要は以下のとおりである。

ページ数：本文171頁

収録数：1頁あたり約24「話」

1) 武藤長平『西南文運史論』岡書院、1926年、51頁。

2) 『唐話辞書類集』（汲古書院）第6集所収『唐話纂要』、第7集所収『唐語使用』、第20集所収『譯家必備』。木津祐子 2000「唐通事の心得——ことばの伝承」（『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院）。木津祐子『『唐通事心得』訳注稿』（『京都大学文学部研究紀要』第39号）。

文字：手書き、写本

発音表記：ほとんどに片仮名による発音表記が付されている

訳・語釈：訳や語釈が付されているものも多い

題辞、序文、跋文、蔵書印、日付等はなし

次に、『三字話』の唐話を語法的に分類し、どのような中国語なのかを見てみたい。用例の一部に付した片仮名は、三字話の下に付された日本語である。

## 2-1. 語法と語彙

### 2-1-1. 名詞

#### 2-1-1-1. 接頭辞

阿：大阿姉

#### 2-1-1-2. 接尾辞

兒：把門兒 紙包兒 竹床兒 孩兒氣 笑話兒 布篷兒 新様兒

頭：讀前頭 抬石頭 抬木頭 烟柴頭 手頭好

子：日子好 肚子疼 担菓子 日子長 白本子 空鼻子 口子上 前年子

方子好 一担子 壁子邊 一遭子 短袖子

上：早上來

裡：夜裡來

間：夜間來 晚間來

道：味道好

家：老人家 後生家 娃子家

#### 2-1-1-3. 方位詞

上：筆尖上 口子上 街上人 油街上 手上痛

下：放底下

裡・裏：正月裏 在家裏

邊：裏邊坐 裏辺坐 在外邊 壁子邊

頭：在外頭 上頭來 上頭去 前頭有

首：外首坐

## 2-1-2. 代詞

### 2-1-2-1. 人称代詞

一人称単数 我：我去説 \*複数形はなし

二人称単数 你：辛苦你 就是你 \*複数形はなし

三人称単数 他：他教你 可惡他 \*複数形はなし

#### 2-1-2-2. 指示代詞

這：這東西 這箇人 這一本 這一箇 這時候 這所在

這些：這些話

這樣：這樣的

這等：這等說

這里/裡/裏：這里來 這裡有 是這裏

是ヶ：是ヶ大 是ヶ小 是ヶ說

此：既如此

那：那ヶ人 那一個 那兩本 那時際

那里/裡/裏：那裡來

那邊：你那邊

#### 2-1-3. 數量詞

##### 2-1-3-1. 個々の量詞

ヶ/個/箇：一兩ヶ 一ヶ月 兩ヶ月 半ヶ月 一ヶ字 是幾個 這一箇

位：是幾位

張：這半張

把：一把刀

件：這件藥

椿：一椿貨

箱：這一箱

項：好幾項

樣：一兩樣 兩三樣 三四樣 四五樣 五六樣 六七樣 七八樣 八九樣

首：讀一首詩

門：這一門

枝：摘一枝

頭：一刃頭 十刃頭

疋：一疋馬

隻：兩隻雞

層：一層皮

等：好幾等

壇：有一壇

錢：二三錢 多兩錢

銖錢：五銖錢

分：多幾分

年：一百年 幾百年

日：好半日 這兩日

天：挨兩天

場：哭一場 笑一場

口：吃一口 吃兩口

杯：請雙杯

步：進一步 退一步

宿：露一宿

#### 2-1-3-2. 接尾辭

～兒：一滴兒 一丟兒 一塊兒 一點兒 一些兒 一片兒 一枝兒 一朵兒  
一件兒 一顆兒 一把兒 一ヶ兒 一枚兒 半ヶ兒

#### 2-1-3-3. 概数

多：十多年

來：十來年 百把年 千把年

把：ヶ把月 ヶ把日

#### 2-1-3-4. 序数

第：第二級 第二句 第二號 第二名

頭：頭一句 頭一號 頭一名 頭一樁

#### 2-1-4. 形容詞

##### 2-1-4-1. 程度を示す表現（後置されるもの）

～得緊：好得緊 多得緊 妙得緊 大得緊 小得緊 厭得緊 貴得緊 賤得緊  
冷得緊 熱得緊 涼得緊 暖得緊 苦得緊 便得緊 險得緊 巧得緊

～得狠：多得狠 疼得狠 快得狠 勇得狠 猛得狠

～得凶：痛得凶 忙得凶

～得劇：好得劇

～死：怕死々

～不過：冷不過

～些兒：厚些兒 薄些兒

～点兒：遲点兒

#### 2-1-4-2. 程度を示す表現（前置されるもの）

好：好熱的 好冷的 好大雨 好大風 好大雪

好大：好大熱 好大冷 好大旱

好不：好不苦

太：太多了 太性急

忒：忒少了 忒快了

老：老貴的

漫：漫大的

多：多慢阿

極：極利害

最：最可惡

許多：許多好

十分：十分窮

不大：不大好 不大用

只是：只是冷 只是熱

#### 2-1-4-3. 接尾辭

兒：中々兒

#### 2-1-4-4. 樣態補語を伴うもの

晴得好

#### 2-1-4-5. 方向補語を伴うもの

好起來 ヨキオキジブン

#### 2-1-4-6. 動詞を修飾しているもの

好：好做的

正好：正好吃 正好学 正好去 正好做 正好來 正好穿

不好：不好說 不好講 不好來

不便：不便去 不便講

2-1-4-7. 重複形式

慢慢走 小々の 大々の 粗々の 長々の 短々の 方々の 圓々の 細々の  
寬々の 扁々の 滿々の 静々兒 平々の 勻々の 齊々の

2-1-5. 比較句

好似他 他ガヨフニヨイ 貴似他 他ガヨフニタツトイ

不如你 不如他 不如我

勝過你

2-1-6. 動詞

2-1-6-1. 接尾辞

～兒：吃々兒 嚼々兒

2-1-6-2. 可能

會：會吃酒 會吃飯 會騎馬 會寫的 會算的

不會：不會做 不會講 不會說 不會寫

會得：會得做 會得講 會得說

2-1-6-3. 依頼・使役

請：請西瓜 請便罷 請說々

叫：叫他來 叫你去

教：教你做 教他作

讓：讓他做 讓你來 讓我說

～死：腦死他

～着：慢些着

2-1-6-4. その他

要睡覺 何消說 你該去 肯教的 不肯教

2-1-6-5. 結果補語

賣完了 做完了 鎖好了 粘住了 學會了 講錯了 算差了 看慣了 聽慣了 說明白  
講明白

2-1-6-6. 樣態補語

說得好 起得遲

## 2-1-6-7. 方向補語

放出來 噴出來 放出去 解開來 打開來

## 2-1-6-8. 可能補語

背不出 背得出 賣得完 賣不完 做不完 做得完 說得來 通得來 通不來

## 2-1-6-9. 完了

了：吃了驚 開了門 關了門

過：學過的 看過的 講過的

過了：措過了

## 2-1-6-10. 重ね型

VV：洗々臉 學々話 乘々涼

V-V：晒一晒 吹一吹 抹一抹 措一措 等一等 說一說

VV看：問々看 說々看 秤々看 量々看 聞々看

## 2-1-7. 副詞

## 2-1-7-1. 否定

不：不是他 不長俊

不會：不會看 不會來 不會講 不會措

沒有：沒有収

沒：沒幹了

還未：還未開 還未見 還未喇 還未說

未必：未必真 未必阿

## 2-1-7-2. その他の副詞

只管讀 已來了 已去了 也有的 也沒有 倒出來 恰好有 准定去 另外做

你也寫 都有的 都沒有 纔來說 純是水 全是糖 多拜上 多致意 進又少

用又大 先不先 偶然間

## 2-1-7-3. 接尾辭

～生：一塊生 一直生 一帶生

## 2-1-8. 介詞

把：把我看

把人看



替：替我考

替他辭 他ニカハリテ辞退スル

替他告 他ガカハリニツゲル

替他憂 アレガウレイニカハル

同：同你走 同你來 同他去

和：和他說

向：向他說

朝：朝天的 朝上的

由：由我說

### 2-1-9. 語氣助詞

阿：未必阿 好歎阿 好雨阿 好詩阿 狠的阿 不來阿 多慢阿 失陪阿  
力牢阿 還多阿 拿牢阿

罷：請便罷

了：告別了 不送了 不用了 路干了

哩：又歎哩 就跑哩 話長哩 怎樣哩 完是哩

喇：下雨喇 還未喇 不要喇 歇足喇 遠勞喇

囉：正是囉

里呀：來里呀

～麼：曉得麼 記得麼 吃乳麼 完了麼 讀得麼 自然麼 不用麼 去了麼  
在家麼 曉得麼 不痒麼 也是么 明白麼 走得麼 也好麼

～呢：勾了呢

～呢～：多呢少 熱呢冷 要寫呢 不要寫

### 2-1-10. 反復疑問文

～不～：是不是 肯不肯 好不好 成不成

### 2-1-11. 疑問詞

什麼／甚麼／甚么：為什麼 笑什麼 聽什麼 問什麼 尋什麼 姓什麼  
號什麼 是甚麼 甚麼話 甚麼人 甚么忙

甚：他做甚 你做甚 是甚子

那裡：那裡來 那裡去 那裡人 那裡人 在那裡 那裡呢

多少：要多少 鈔多少 少多少

幾：歇幾天 禁幾天 幾時來

怎麼：怎麼樣

怎的：這怎的

何：何苦的 這何妨 有何說

如何：如何好

## 2-2. 特色のある語彙

2-2-1. 唐人館 唐館 紅毛庫 紅毛船 外江船 出唐船 清水廟 祇園廟  
岸觀音 八幡宮 祭媽祖 媽祖會 白街官 新街官 接王家

2-2-2. 漳州人 福建人 南京人 下南人 暹羅人 滿洲人 紅毛人 日本人  
京上人 東京人 長崎人 江戸人 唐山人 朝鮮人 中華人 高麗人  
中國人 中華人 湖州人 東韃子 河南人 湖廣人 陝西人 江西人  
山東人 北京人 雲南人 台州人 紹興人 徽州人

2-2-3. 漳州話 福建話 南京話 下南話 暹羅話 滿洲話 紅毛話 日本話  
京上話 東京話 長崎話 唐山話 瑠球話 杭州話 唐山音 日本音

2-2-4. 周一使 吳二使 鄭三使 王四使 馮老爹 褚老爹 程老爹 衛老爹  
蔣朝奉 沈朝奉 韓朝奉 楊朝奉 余朝奉 汪朝奉 朱一官 陳二官  
尤三官 某老爺 某大爺 某大官 何伯々 ム伯々 施伯々 呂伯々  
張伯々 孔哥哥 孔大哥 曹二哥 嚴三哥 華四哥 金二弟 魏三弟  
陶叔々 姜叔々 戚大叔

2-2-5. 丁丑年

「2-1. 語法と語彙」で整理したように、『三字話』の三字話は、南方の言葉（「北京語の文法特点」<sup>3)</sup>との不一致、唐話資料との類似）であり、均質的（『唐話纂要』との不一致）で実用的（動作や数量表現など日常会話に使用することが可能な語が多い）である<sup>4)</sup>。

ただ、唐話じたいには実用的な側面を有しているが、それに付された日本語訳を見ると、方

3) 太田辰夫 1964「北京語の文法特点」『中国語文論集 語学篇 元雜劇篇』汲古書院、1995年。

4) 奥村佳代子『江戸時代における唐話の基礎研究』関西大学出版部、2007年

向補語「起来」に対する「好起来 ヨキオキジブン」という訳、比較「～より」を表す「似」に対する「好似他 他ガヨフニヨイ」という訳、介詞「～のために、～に」を表す「替」に対する「替他憂 アレガウレイニカハル」という訳などのように、明らかに誤りとみられるものがあり、三字話を収集した人物に唐話の知識があったとすれば、唐話を収集した人物と日本語訳を付した人物が、果たして同一であったかどうかは疑問を抱かざるをえないと言えるだろう<sup>5)</sup>。

また、「2-2. 特色のある語彙」で提示したように、長崎の地名や中国の言語や人を示す語が見られることから、唐通事が習得し使用した語に関連していると考えられる。

年代を示す語として「丁丑年」が唯一含まれていることに、特別な意味があるならば、これらの語句が集められた年代か、この資料が書写された年代を示している可能性があると考えられる<sup>6)</sup>。

一語一句については、問題を孕むものも存在しているが、本論では、整理し提示するに止めたい。

### 3. 『唐話纂要』及び『南山俗語考』の「三字話」との比較

次に、三字の語句を収録している『唐話纂要』と『南山俗語考』との比較を行いたい。前述のように、三字話が独立したひとつの書物となっている例は珍しく、『三字話』には不明な点も多いため、比較の対象として、いずれも江戸時代に広く出版されたが、収録語彙や分類の仕方に違いの見られる2資料を取り上げ、『三字話』の性格や傾向を探ることが目的である。

『三字話』と『唐話纂要』(1718) 巻1の「三字話」、『南山俗語考』(1812) 巻1の三字話との一致状況を以下の表に示す<sup>7)</sup>。『三字話』は三字話、『唐話纂要』は纂要、『南山俗語考』は俗語考と表記する。

[[『唐韻三字話』『南山俗語考』巻1『唐話纂要』巻1に見られる三字話の一致]

俗語考	日本語訳	三字話	日本語訳・語釈	纂要	日本語訳
熬了夜	ヨヲアカス	熬了夜	ヨアカシスル		
雨來了	アメガフリダシタ	雨來了	アメノフル		
陣頭雨	トヲリアメ	陳頭雨	ニワカアメ		
東南風	コチハヘ	東南風	コチカゼ		

5) 語法と語彙の分類の中で、誤った訳をしていると考えられるものには、片仮名表記の日本語訳を添えた。

6) 「丁丑年」は、1673年(寛永14年)、1697年(元禄10年)、1757年(宝暦7年)、1817年(文化14年)、1877年(明治10年)などが該当する。

7) 『唐話纂要』巻1には「三字話」の項目が設けられており、『南山俗語考』は文字数による分類項目はない。

東北風	キタコチ	東北風	キタゴチ		
西南風	ハヘニシ	西南風	ハエ		
西北風	ニシキタ	西北風	アナゼ		
露一宿	イチヤヨツユニサラス	露一宿	イチヤツユヲトル		
月初頭	ツキノハジメ	月初頭	ツキカシラ		
月半邊	ハンカゲツ	月半邊	月ノナカバ		
箇把月	一ヶ月ホド	ケ把月	一ヶ月バカリ		
大前日	サキヲトトヒ	大前日	センジツ		
這兩日	コノゴロ	這兩日	コノ両日		
一時間	一時ノアイダ	一時間	イットキ		
新年頭	ネントフ	新年頭	新年		
三月三	(上巳 三月三日) 同上	三月三	叫做上巳上巳ト云フ		
五月五	(端午 五月五日) 同上	五月五	叫做端午		
七月七	七夕	七月七	叫做七夕		
九月九	(重陽 九月九日) 同上	九月九	叫做重陽		
近了年	セッキニイタル	近了年			
暖得緊	イカフアタタカ	暖得緊	シゴクアタタカナ		
冷得緊	イカフサムヒ	冷得緊	シゴクツメタイ	冷得緊	イカフサムイ
熱得緊	イカフアツヒ	熱得緊	シゴクアツイ	熱得緊	イカフアツヒ
涼得緊	イカフスズシヒ	涼得緊	シゴクスズシヒ	涼得緊	イカフスズシヒ

上の表に示したとおり、『三字話』と『南山俗語考』巻1、『唐話纂要』巻1「三字話」との一致状況を見ると、『三字話』と『南山俗語考』とにより多くの一致を確認することができる。

さらに、『南山俗語考』の六字、九字、十二字から成る語句が、『三字話』では、分解された三字の語句の形で連続して配置されている例が見られる。(巻末に、六字、九字、十二字の一致語句を列挙しているのでご参照ください。)

『南山俗語考』の六文字以上の語句と『三字話』で連続している語句

『南山俗語考』	『三字話』
玉琢成粉捏就 玉ノヨウニミカイタモノヲツカミクダヒタ	玉琢成 タマデゴシラヘタ 粉捏就 ヲシロイデゴシラヘタ
説一句笑話児散々悶 ヒトクチノオトシバナシガキバラシニナル	説一句 一句トク 笑話児 ワライゴト 散々悶 ウッサンスル
好京酒燙一燙拿來吃 ヨキカミサケヲカンシテモチテキテノメ	好京酒 ヨキクダリザケヲ 燙一燙 カンシテ 拿來吃 以テキテノマセヨ
東也送西也送一担子送完了 アチコチオクレバヒトカツギノブンハオクリシマフタ	東也送 アチラニオクリ 西也送 コチラニオクル (ハ) 一担子 イッカ 送完了 ラクリシマッタ

『三字話』と『南山俗語考』巻1を中心に調べたところ、一致状況は次のとおりであった。

「 」内は、『南山俗語考』巻1に設けられた細目である。

「天文時文」161語中79語が一致

「地理名称類」66語中29語が一致

「人品類」234語中109語が一致

「身体類」152語中53語が一致

「親族類」30語中11語が一致

「性情類」71語中54語が一致

「視聽動作坐立趨走出入去来類」146語中85語が一致

『南山俗語考』に収められた三字話のうち、約48%が『三字話』と一致している。ただし、配置は順序だっではおらず前後しており、順不同である。

また、『南山俗語考』の六字以上の語句で、『三字話』では連続する三字話二語以上から成り立つものは、以下のとおりである。

巻1～巻5の6字話101語中36語が該当

巻1～巻5の9字話で該当するもの3語

巻1～巻5の12字話で該当するもの1語

ここでも、40%近くの一致が見られる。

また、『唐話纂要』巻1「三字話」476語中、『三字話』と一致するものは41語であった。

『三字話』『南山俗語考』『唐話纂要』の比較結果からは、『南山俗語考』と『三字話』とにより密接な関係性が認められると言えるだろう。

#### 4. 『三字話』と『南山俗語考』

『南山俗語考』（五巻）は、薩摩藩第25代藩主島津重豪（1745-1833）の命により、明和4年（1767年）に着手され、文化9年（1812年）に刊行された<sup>8)</sup>。自ら編纂に当たった島津重豪は良く唐話を話した人物であり、『南山俗語考』は薩摩藩における唐話学習の必要性から、嗜好としてではなく実用のために編纂された書物である。項目ごとに二字から十二字の語句が収められ、すべての語句に片仮名表記の発音と日本語訳あるいは語釈が付されている。先行研究により、南京、浙江一帯の広い地域の音を対照としていること、その稿本である『南山考講記』との異

8) 「明和丁亥仲冬日南山主人識」、「文化九年花朝古賀樸著」。

同状況が報告されている<sup>9)</sup>。

『三字話』と『南山俗語考』とは、語句の一致はあるが、構成は大きく異なっている。

【『南山俗語考』と『三字話』の構成】

『南山俗語考』	『三字話』
分類あり 天部、地部、人部、器材部、文学部、兵部、 疾病部、船部、居処部、食物部、鱗介部、昆 虫部、走獣部、飛禽部、草木部、馬匹革轡部、 衣飾部 それぞれの「部」の下にさらに「類」をおき、 細かく分類している  「類」の中での配列の工夫 例：「茶」「烟」に関する表現をまとめている  全てに日本語訳がある	分類なし          配列の工夫は見られるが徹底されていない。 例：「拿」を用いる語のあつまり 日付、漢字の偏、数量表現のあつまり   日本語訳や語釈のないものも多くある

『三字話』と『南山俗語考』とは、構成や体裁は異なる点が多いが、語句じたいは偶然とは言  
 い難い一致が見られる。『三字話』には、『南山俗語考』の分類や配列が反映されてはならず、  
 『南山俗語考』を参照しながら三字話を順番に抜き出して書き写されたものが『三字話』だとは  
 考えがたい。むしろ、順不同に一致している点からは、解体された『三字話』が『南山俗語考』  
 の分類にしたがって収録されなおしたと考えられるだろう。

『三字話』が書写された地点は明らかではないが、すでに確認したように、長崎貿易に関連す  
 る語句が含まれていることから、唐通事が長崎で使用した語句が収められていると考えられる。  
 このような唐話の知識を必要としたのは長崎唐通事ばかりでなく、薩摩藩に置かれた唐通事に  
 とっても必要であった。

『南山俗語考』が出版された薩摩藩の唐通事は、唐話習得のために長崎に行くこともあった。

鹿兒島には唐通事の頭目ともいべき家があって半内各地の唐通事を集めて時々唐話の講

9) 中田喜勝 1970「南山俗語考の音韻について」九州大学『中国文学論集』第1号。矢放昭文 1981『『南山俗語考』初探』鹿兒島経大論集』第23巻第1号。矢放昭文 1984『『南山俗語考』再探』鹿兒島経済学地域経済研究所『地域研究』。岩本真理 1989『『南山俗語考』のことば』鹿兒島経大論集』第30巻第1号。岩本真理 1990『『南山俗語考』の語彙的特徴』大阪市立大学『人文研究』第41巻第5分冊等の先行研究がある。「北京語の文法特点」と照らして、北京語の特徴である「很」が「狠」という表記で用いられている例が一例のみある(狠好 イカフヨヒ)。

習を開催するという風で、唐通事中熱心なものは長崎まで留学して其地の唐通事に就きて支那語を稽古するという有様であった、而して薩藩の唐通事はその階級が本通事、本通事助、稽古通事、通事稽古の四通に分れて、本通事には扶持米八石より六石まで、本通事助には五石、稽古通事には五石より三石六斗まで、通事稽古には二石五斗より一石八斗までを給して居た<sup>10)</sup>

また、薩摩藩で唐話を記述した書物の編纂が行われた可能性が指摘されている。

而してその教科書としては『二字話』『三字話』『長短話』『小學生』『請客人』『要緊話』『苦惱子』『譯家必備』『瓊浦通』『三才子』『三折肱』『養兒子』『闇裏闇』等を讀習ひ『小説精言』『小説奇言』『三國志』『今古奇觀』『唐話試考』等を卒業するを常例とした、其中で『二字話』『三字話』『長短話』『請客人』『苦惱子』等は鹿兒島藩で刊行されて居たという説もある、<sup>11)</sup>

薩摩藩の唐通事による唐話学習に関する先行研究を踏まえると、『南山俗語考』には、稿本である『南山考講記』以前に、編纂の手がかりとした基礎の素材があったのではないかと考えることが可能だろう<sup>12)</sup>。

## 5. まとめ

本論では、『唐韻三字話』と『南山俗語考』、『唐話纂要』との一致状況を調査し、『唐韻三字話』と『南山俗語考』との関連を指摘した。また、実用の語を収集することを目的とした『南山俗語考』に『唐韻三字話』の語が多く含まれるということは、『唐韻三字話』の実用性をも示していると指摘することができる。『南山俗語考』と一致する語句じたいは、刊行前の1812年以前に、唐通事が三字話として習得を目指した語群が呈示されていると考えられるのではないだろうか。

ただし、この『唐韻三字話』という資料そのものが、『南山俗語考』の編纂過程で参照されたかどうかは、2-2-2以降に挙げた語群が収録されなかったことを踏まえて慎重に扱う必要がある。また、『唐韻三字話』の書写年代は、紙の保存状態から見ても、比較的新しい可能性もある。残された問題点や、『遊焉社常談』などその他の資料との比較は、別稿で取り上げたい。

10) 武藤長平『西南文運史論』岡書院、1926年、56頁。

11) 上掲書 56、57頁。

12) 『南山俗語考』のほか、『遊焉社常談』(1770年刊)とはより高い語句の一致状況が見られる。この点については、別稿「『遊焉社常談』の構成」(『東アジア文化交渉研究』第7号、2014年)で取り上げている。

〔『南山俗語考』の六字、九字、十二字の語句と『三字話』の一致〕

玉琢成粉捏就 玉ノヨウニミカイタモノヲツカミクダヒタ  
 把木梳掠一掠 クシニテケヅリソロエヨ  
 發了惱狠的阿 ハラヲタテタラキツカロフ  
 看得見有限的 タカガシレタコト  
 要去看就去 ユキテミタクバユキテミヨ  
 瞪開了眼睛看 メヲミヒライヒテミヨ  
 狐狸炒困不着 キツネガアレテネラレヌ  
 風頭地不要困 カゼノフクトコロヘネルナ  
 天亮了好起來 ヨガアケタオキテミヨ  
 咬定的再不放 オヒウキテハナサヌ  
 便路了走去見 モヨリガヨヒユイテミヨウ  
 只顧己不顧人 タダヲノレヲミテ人ヲミヌ  
 進一步退一步 ヒトアシススミヒトアシシリゾク  
 說一句笑話兒散々悶 ヒトクチノオトシバナシガキバラシニナル  
 在客邊寂寞些 タビハサビシイ  
 進又少用又大 イルコトハスクナクツカフコトガオホヒ  
 小做小还用的 チヒサクナッテモマダモチヒラルル  
 好京酒燙一燙拿來吃 ヨキカミサケヲカンシテモチテキテノメ  
 吃了酒好解愁 サケヲノンデウレヒヲトク  
 吃些酒好消憂 サケタバテウツヲハラス

(上の二つの語句に関しては『三字話』では、「吃些酒 好解愁 吃了酒 好消憂」と並んでい  
 る。)

点火來照々看 火ヲトボシテテラシテミヨ  
 醃過夜第二日就好吃 ヒトヨサホシテアシタニクrof  
 全是糖竟不苦 サトウバカリデニガクナヒ  
 吃了他生病的 アレヲクヘバヤマヒガデル  
 福祿壽頭長的 フクロクジュハヅガナガヒ  
 東也送西也送一担子送完了 アチコチオクレバヒトカツギノブンハオクリシマフタ  
 櫻樹皮做蓑衣 シュロノカワヲミノニツクル  
 福壽香溜球出 フクジュカウハリウキウデ



日子長好讀書 日ガナガクシテショガヨミヨヒ  
 把盞兒指々字 ジサシデジヲサセ  
 我也讀你也寫 ワレハヨムソチハカケ  
 新開の上好筆 アタラシクオロシタルヨキフデ  
 幼而学壯而行 イトケナフシテマナビスカンニシテオコナフ  
 甚麼人做起的 ナニビトガシタテタカ  
 調兵馬好去打 セイヲソロヘテヨクセムル  
 這件藥行血的 コノクスリハチヲメグラス  
 紅毛船開了去 オランダブネガ出船シタ  
 有鑰匙鎖好了 カギアリ○ジャウマヘヨシ  
 把門兒上一上 トシヤウシヲハメヨトト云コト  
 淘了米好煮飯 コメユリテメシヲタクニヨキジブン

【附記】本稿は、平成25年関西大学アジア文化研究センター「東アジア文化資料のアーカイブズ構築と活用」の研究拠点形成（代表者：松浦章）」における研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 岩本真理 1989 「『南山俗語考』のことば」『鹿兒島経大論集』第30巻第1号。  
 ——— 1990 「『南山俗語考』の語彙的特徴」大阪市立大学『人文研究』第41巻第5分冊）  
 太田辰夫 1964 「北京語の語法特点」『中国語文論集 語学編 元雜劇編』汲古書院1995を参照。  
 木津祐子 2000a 「唐通事の心得——ことばの伝承」『興膳教授退官記念中国文学論集』汲古書院。  
 ——— 2000b 「『唐通事心得』訳注稿」『京都大学文学研究紀要』第39号。  
 中田喜勝 1970 「南山俗語考の音韻」九州大学『中国文学論集』第1号。  
 武藤長平 1926 『西南文運史論』岡書院。  
 矢放昭文 1981 「『南山俗語考』初探」『鹿兒島経大論集』第23巻第1号。  
 ——— 1984 「『南山俗語考』再考」鹿兒島経済大学地域研究所『地域研究』第13号。